

城氏は、親分はだの人、奥地から避難してきた人達を、自分もその中の一人でありながら、笑顔で迎え、よく面倒をみておられた、そういう私も結城氏の世話で、ダンスホールに勤め、楽しく過したことは忘れられない。

(十二) 私は二十一年十一月、帰国したが、あれから早や四十七年目の終戦記念日を迎えようとしている。

引揚げ後、農林水産省に勤務、定年退職後、水戸市農協役員として、第二の職場にいるが、やはり平和とこの頃である。

コンクリートのベット

栃木県 岡村善四郎

昨夜もろくに眠れなかった。寒さのせいばかりではない。昨日、ソ連の裁判官に言われたことを、何と説明したらいいのか。

「アナタミカドチュセツアルネウソダメホントハナ

シナサイ」通訳の説明によると、誰の著書か、天皇に関する著書で、御門と題する本があり、ソ連軍ではこの本に基づいて天皇と国民の特質的關係を解明しようと調査研究しているとのことだった。その御門である。どう陳述しよう。敦化県城内の元日本軍部隊の建造物を改造したいかめしい仮獄舎に閉じ込められていた。

この仮獄舎から少し離れたところに、ソ連吉林方面軍の仮軍事法廷が敦化に設けられてあった。

法廷では毎回、必ず訊問書を確認させられ、間違はありません、とサインをすることになっていた。昨日サインの折、月日に気付いて驚いた。ここに移されてから五十日近くになっているのである。十一月の北滿は寒い、大地はすでにカリカリ凍りついているのだ。

この仮牢に移された時は薄暗く、よくわからなかったが、目が慣れて見えるようになった。窓はすべて重に厚壁で隙間もなく、外は一切のぞけなかった。私は左隅に腰をおろし、ぐったりしてしまった。次から次へ不安がつのり、先が思いやられて情けなかった。

自分は今どんな立場にあるのか、それに気付いたのは、ここに移される前の独房に監禁され、四度目か五度目の訊問の時であった。将校ばかり五、六人の前に引き出され、質問の末、お前は調査により、日本軍スパイである事が判明している。正直に答えることが、自身の利益になる。結論は一方通行で弁解はできない。私は自分の知らぬ間にスパイと決定されているのだ。この軍事法廷での厳しく執拗な訊問は、そのためであった。一般捕虜と違った特別扱いも、それがためであった。

オカムラ、オカムラ、と私を覗き穴から歩哨兵が呼んでいる。

今日の歩哨は、中年の大男で和やかな兵であった。

私は、独房から歩行で百三、四十メートル先にある軍事法廷までの通路の往復が、唯一の健康法であり、日光浴もできる、あたりを観察するのもこの時間である。汽車の音から判断すると、ここは敦化県城外の北東の地点らしい、今日の軍事法廷は厳しい佇みで、私を待っていた。正面の大テーブルの中央に裁判官、そ

の左右は検事、右壁を背に並んだ四人は通訳、左の四人は書記、記録係、皆ソ連軍人である。

私の左右は拳銃を刺き出しにした憲兵、出入口の扉には円い弾倉付きの自動小銃の歩哨が立った。私は二人の憲兵に挟まれて小さな机の椅子に腰をおろした。気のせいか、今日の主任通訳は威儀を正し、真正面から私を見据える構えであった。

裁判官が何やら宣言するや、透かさず通訳は「オカムラミカドチュセツハナシナサイ」と指示した。私は昨夜からの思案、考えが胸にこみあげてきて、何かから話そうか、喉はカラカラになり戸惑ってしまった。やっと立ち上がったが声が声にならない。

裁判官初め、廷内は一瞬静まりかえり、私の次の言葉を待つて一同の視線が私に集まった。私は、昨夜こう考えた。天皇に対する国民の忠誠心の概念を話す前、無条件降伏後の日本の現状を確かめよう。この機会を逃しては一生知る日はあるまい、祖国日本の姿を知りたい、今日までこの法廷では当人からの申し出は一度も認められたことは無く、申し出も黙殺か、本官の質問に

だけ答えよ、と怒鳴られるだけだった。何時ものことではあるが、本題の訊問に入る前、今までの陳述の中から二、三確認のための訊問が二、三十分あった。この訊問で一番困ったのは年数のすべてが西暦何年のことで運び、日本の元号は通用しない。時には西暦の数え方違いで、私の陳述が虚偽の申し立てだ。とどなりつけた日もあった。

「ミカドチウセツ」を話しますが、今日、日本はどうなっているのですか。連合軍の統治下に分割されたのですか、天皇はどこにおいでになりますか。国の無い民族は流浪の民であり、天皇の無い日本に私の忠節はありません、教えて下さい。わからなければ忠節の話は私はできません。私は知らずの間に両手の拳をしっかり握りしめていた。

通訳が次、次と裁判官、検事と何か打合せを始めた。今日はどうなるのだろう。前に余りの寒さに耐えかねて外套を貸して下さいと願ひ出た時、お前のようなスパイに貸す衣類は無いと断られたことを思い出す。二、三十分ほど経って一同元の席に戻ると、裁判官は、私

の陳述願いには何も答えず、本日の訊問は終わった。と閉廷を宣した。

例の通り、私は陳述書を確かめ、サインをした。

今日も裁判官は靴のまま大テーブルの上に足を投げ出し、ピーナッツを頬張り出した。

部屋に戻ると、若い歩哨らは私を小突くようにして薄暗い部屋に押し入れるが、老兵の歩哨は扉を閉めると覗きもせず外に出て行った。

この部屋で気付いたことは、朝と夕方、太陽が低い時点に窓をとざした一枚の節穴から糸のような光線が東南に三本、西に二本射し込んでくる。私はこの線先の光の筋で大凡の時間を見当づけていた。気がつくると西の光の筋が平らに射し込んでいた。間もなく陽が沈む、寒さは日一日と酷くなる。

人間の耐寒限度は、どの条件ならどうなるのか私は知らないが、夏の軍服上衣と夏シャツ一枚の私には耐寒の限界をとつくに越した毎日であった。

何糞と気力だけは何とか、この苦境に耐えられても、瘦せ衰えた体には己の力がすでに抜けていた。

今宵も瘦せこけた、この私にコンクリートの床は安眠を与えてくれそうも無い。十一月の寒気は容赦なく襲いかかる天井の赤い豆ランプが涙の中にぼやけてしまった。

死の淵からの引揚げ

北海道 吉田久子

第一部 夫は銃殺、二人の子供に死なれ

北海道の占冠村は五十年前も前は陸の孤島と云われる程の寒村で汽車でさえ見た人の少ない時代でした。

私は体が弱く農業には堪えられず、父は大酒呑みで、若い者が疲れる筈がないと言われ農家に嫁ぐのは向かない、恋愛も、結婚もしないと心に決めておりました。父に怒鳴られればお仕舞です。

大東亜戦争が勃発した翌春昭和十七年春二十歳で満州で現地除隊した田村という同郷の人と結婚して渡満し、十八年長女、十九年長男と年子に恵まれました。

主人は弱い私を心から大事にして下さり、結婚の幸せにひたつておりましたが戦争はだん々々激しくなりラジオニュースでは敵の損害甚大なり、我が方の損害軽微なり、を信じながらも主人にいつ召集が来るのかと不安の毎日でした。

昭和二十年七月二十日予想していた召集が来ました。私は貴方だけを頼って満州迄来たんですから手紙だけは下さいと何度も念を押して送り出した、夫からの手紙は待てども々々も来ません。私は毎日書いても夫の住所が判らず溜ってゆきます。

召集されてから十一日目に住所のない夫の手紙が配達され、秘密部隊に入ったこの手紙もやっと外出する兵隊に頼んで出したという、私は声を上げて泣き崩れました。：がこうしてはいられない子供をすっかり育てなくてはと自分に命じました。

やがてソ連が参戦し満州に攻めて来ました。牡丹江や玉泉にいた日本人はハルピンに避難することになり荷物は持って行けないので衣類など売り八月十三日に駅に行きましたが無蓋車です。雨が降って来て沿線に